

告発！「医療過誤の現場から」

写真 伊藤隼也

うっせにさせられ「窒息死」した菜穂を返せ！

神奈川県横浜市
榎川菜穂ちゃん
（当時生後1日）



▼たった一枚だけ残った菜穂ちゃんの子供の足跡。その足跡は、ママの泣き顔と重なって、ママの心を打ち抜いた。ママは、ママの涙を拭きながら、ママの涙を拭きながら、ママの涙を拭きながら……

「あんなに元気な泣き声で生まれてきたのに、たった二日しか生きられなかった。母として、お乳もあげられず、一度しか抱いてあげられなかったんです」

榎川菜穂ちゃん(38)は、98年2月8日午前1時、自宅近くの浜野産婦人科医院(神奈川県横浜市)で、二人目の子供を無事出産、母子ともに健康であった。

午後7時半頃、富久美さんの入院する部屋(個室)に、助産婦が生まれたばかりの菜穂ちゃんを連れて来た。初めて抱く二人目のわが子は、スヤスヤと眠っていた。15分余りの母子の連れ合い。まだ

か、これが最初で最後となってしまおうとは思ってもよらなかった……。

9日午前0時ごろ、助産婦はミルクを飲ませた後も泣き続ける菜穂ちゃんを、うつせ寝にして新生児室を離れた。

それから2時間半後、おむつを替えるにきた別の看護婦が、冷たくなった菜穂ちゃんを発見した。出生直後の首も据わらない菜穂ちゃんは、枕などで鼻と口を塞がれ、厚い掛け布団で身動きもとれず、自力で逃げる術もなく、たった一人で苦しみながら窒息死してしまっただけ。深夜は人手不足となるため、助産婦は、

赤ちゃんがよく眠り、手がかららないとされる。うつせ寝にしたのだから。しかしそれにしても、亡くなるまで気づかなかったとしたら病院側の看護・管理態勢はあまりにも杜撰であった。

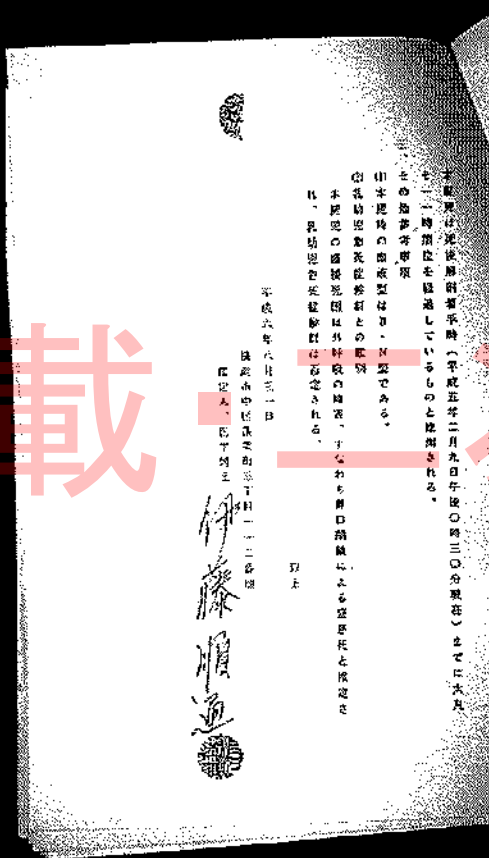
「病院から、うつせ寝にしている窒息死させてしまった」という連絡を受けた時は、すぐに状況を飲み込みなかつた。数時間前までは仰向けにスヤスヤと寝ていたんですから」(父・文治さん、41)

文治さんは、すぐに病院に駆けつける。そして、唇が真っ黒になった娘の変わり果てた姿を目の当たりにし、怒りと悲しみから何度も嘔吐したという。「誰がうつせ寝にしてくれたって頼んだよ」と泣き叫ぶ声が深夜の病院に響き渡った。

文治さんは、出産直後の富久美さんにはあまりにもショックが大きい、と思いついて、菜穂ちゃんの死を知らせなかつた。「夫がうまく私を騙してくれた。菜穂という名前前は、私が病室で考えたんです。本当は、菜穂子としたかったんですが、画数が悪いと聞いてやめたんです。でも、その時はもう死んでいたんですね……」

3日後の2月12日、いつまでたっても菜穂ちゃんと対面できないことを痛く感じる富久美さんが、文治さんには彼女を自宅に連れ帰る。

「赤ちゃんは星になったんだよ……」



転載

転載・二次使用禁止



▲司法解剖の結果は「窒息死」だったが、一審の結果は「過失を認めない病院も、抜糸官にも憤りを感じます」。樺毛さん夫妻の怒りと悲しみは続く

不安げな富久美さんに対し、文治さんは静かに、菜穂ちゃんの死を告げた。翌日、文治さんは菜穂ちゃんの出生届と死亡届を出すために役所に向かった。「妻子の前では「らえていました」が、歩きながら涙が後から後から溢れて止まらなかつた。本当につらかつた……」

病院側は、自らの看護・管理ミスを認め、土下座までして全面的に謝罪した。怒りと悲しみを抑え、樺毛夫妻は弁護士に損害賠償の話し合いを依頼する。ところが、7月下旬、病院側は突如として「あれは窒息死ではなく、SIDS(乳幼児突然死症候群)。病気なので病院には責任はない」と通告してきた。警察が、「窒息死と推定される」との司法解剖結果を受け、病院を「業務上過失致死罪」で書類送検していたにもかかわらず、である。

樺毛夫妻は、病院側のおまりの仕打ちに対して医療過誤裁判を起したが、大方の予想を裏切り一審敗訴。さらに、檢察もなぜか病院を不起訴処分にした。

「菜穂が、あの病院のベッドで一人苦しみながら死んでいった、と思うといまでも涙が止まりません。連夜の隣に触れたあの子のツルンとした頬の冷たさは、6年たったいまでも、この手のひらにしっかりと残っているんです。いったい正義とは何なのでしょう。でも、泣き寝入りはしません。このままでは、病院内での乳幼児の死はすべてSIDSにされてしまいきますから」(富久美さん)

これに対し、病院側は「取材は遠慮します」と口をつくむだけ。この国の医療、司法には「良心」はないのだろうか……。